

[制作記録]

緋の表象 — 土の相と質 —

山本 健史

金沢に赴任したのは2007年4月のことである。それまで陶磁器で作ったパーツを箱の中に入れた作品を主に作っていたが、それは土を焼成する際に起こる様々な現象を箱の中で構成することにより生まれる視覚的な面白さを狙った作品であった。金沢に移り住み、この地独特の素材に対する精神性に触発され、箱の中で成立させていたそれまでの2次元的な世界を飛び出し、立体感や素材感をじかに感じられるような新たな取り組みを始める事とした。

はじめに頭の中に浮かぶかたちをスケッチし、その中からいくつかを選び出し原型を作り、石膏型を使って原型通りの形を得る制作を行っていた。使用する土は以前から使っていたもので、色も白・黒・赤など様々であった。

作品の多くは自然界にある様々な形をモチーフにしたものが多く、それらの形態を優先させていたため表面は滑らかに削り、目立った表情はなかった。いくつかの作品を制作するうちに、かたちを土に置き換えるだけではなく、素材感あるいは表面のあり方を選択し強調する事により、土を素材としている意味を与え、考えがより深まっていくきっかけになるのではないかと考え、様々なテストを始めた。以前から有機物と土との混合による様々なマチエールの面白さには気がついてきた事もあり、土の中に金属や植物を混ぜ焼成し、それらが見せる表面の状態を観察する事を繰り返した。その中でも特に赤土と植物繊維の組み合わせにより生まれる様々な表情に興味を覚えた。赤土と植物繊維が焼成をとおして示す色や質感に、高度に洗練された陶磁器にはない人が土と接する事の原点に戻るようなイメージを抱くようになった。

個展 —土の相と質—

〈ギャラリー一点／金沢 2008年6月〉

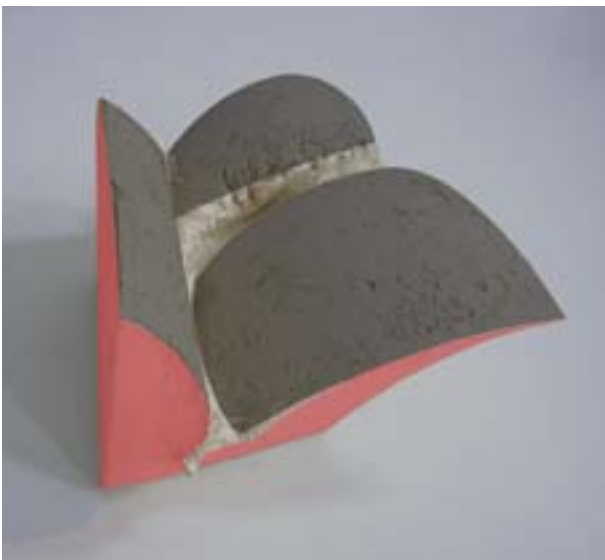
この展覧会では大地をテーマとし、前室には以前に行ったテストからイメージした比較的大きな作品を中心に展示した。後室では少し雰囲気の違いを壁に展示した。後室の作品は前室の作品を作る際、石膏型の中に土を入れ乾燥を待つ間に土の重さに耐えかねた型が割れてしまった事に由来している。土が入ったまま割れてしまった石膏型を数日後に片付けた際に割れた表情を残したまま変形した土を見つけた。割れた石膏型は原型をとどめていないが粉々というわけでもない。型のカーブを残しながらその土くれは割れた境界だけが鋭いエッジを突き出し、あるいは深い溝を刻んでいた。私の頭の中で作り出されるイメージよりも、この偶然の出来事の方が作りたかったイメージに近いという皮肉な結果が生まれたのである。それは作品という結果を導き出すために淡々と作業過程を積み上げて形を仕上げ、はじめに考えたものが無事に出来上がるという事よりも、制作過程で素材が示す様々な事象と私との接点を見つめることの大切さを改めて気づかせてくれるきっかけになったのである。

以降、具体的な意味をあまり感じない単純な形(球体・円柱・角柱)を基本とした石膏型をいくつか作り、型を複数板の上に並べ、型の上に土をこめ、さらにその土同士を壁で繋いでいくという方法で造形する事を続けた。割れた型同士の境となる部分のエッジのせめぎ合いと、異なる面を繋ぎ合わせる曲面による対比と調和を生み出すためである。

異なる型同士は一体ではないために、その上に

土を乗せただけでは、ばらばらのパーツが複数できるだけの結果に終わる。あるいは一体化されていたとしても非常に脆弱な板に近いものになるはずである。それを強固な立体造形物として成立させるために、型にこめられた土の縁を自由なカーブを用いた土の壁で継ぐことにした。(説明図版を参照)

この方法では石膏型が安定した状態で土をこめ、それぞれを繋ぎ、土が乾燥し自重に耐える固さになるまで待つ必要があるため、作品の天地を上下逆さまで作る。通常造形物を作る際には自分のイメージを確認するために、可能な限り完成形に近い状態で作業を行う事が多いと思われるが、この制作行程ではそれができない。石膏型を並べた段階である程度のかたちは想像できるのだが実体のない空間に思いを馳せるしかない。不自由とも思えるこの方法は、実はこの作品にとって重要な要素であると考えている。頭の中やスケッチブックの上で計画された形ではなく、並べた複数の石膏型同士の間でできる負の空間の中に直感的なイメージを見つけ出す事は、それまでの私の制作態度とは全く異なる方法論だからである。



<説明図版>

この作品では石膏型に押しあてた部分をグレイに、その土同士をつなぐ壁を赤に分かりやすいように色付けた。土をこめる時には天地逆さまで作るため形をイメージしにくい、そのイメージを見つけ出すことが造形に結び付く。

個展 —連理の壺—

<品ギャラリー／京都 2009年2月>

この展覧会でのテーマは、前回の個展から生まれた作品の発展である複数の型とそれらを連携させる曲面による土の色と質とを、空間の中でいかに活かすかということであった。

品ギャラリーは繊維問屋の蔵を改装してできており、内部は昔からの土壁や柱を活かした独特の空間を持っている。この場に私の作品を設置した時、古い日本の建築物に使われている素材やそれらが持つ形と、私が行っている作品制作の間に何か関連があるのではないかと感じた。それは柔らかな表情を持つ土壁と柱や長押が作り出す強い対比を感じさせる空間において、作品の色や表情を含めて、十分とはいえないまでも土の持つプリミティブな力を感じたからである。

土壁と柱などの対比のあり方は簡潔な十文字や格子を連想させ、色彩的にも非常に強い。この空間に緋色の、土や繊維の質感を残した作品が置かれ、それらは底面をのぞいて平らな面がほとんどない複雑な曲面で成り立っているものである。蔵が作り出す空間と作品とが、自然素材と人為による触覚的調和感覚と、色彩や形態における造形的相反要素のせめぎあいによって、場が何かを語り始めようとしているのを感じたのかもしれない。

そしていま、私が作品にこめたかった想いをもう一度振り返るべきであろうと思う。今後、土に対して日本人が抱く精神性を振り返り、感じとり、その意識の始原を表現していきたいと考えている。

(やまもと・たけし 工芸／陶造形)



ギャラリー点 前室



ギャラリー点 後室



品ギャラリー